緋鳥物語

蟲鳥獣

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んで目が覚めたら、ＳＣＰ―４４４―ｊｐに似た何かになっていた人間の物語

目次

第0話 …… 1
第1話 …… 4
第2話 …… 6
第3話 …… 8
第4話 …… 10
第5話 …… 12
第6話 …… 14
第7話 …… 16
第8話 …… 18
第9話 …… 21
第10話 …… 23
第11話 …… 26
番外1話「とあるSCP」 …… 28
第12話 …… 30
第13話 …… 32
第14話 …… 34

第０話

「う、うーん・・・はっ」
俺は目を覚ました。
視界には赤が、飛び込んでくる。
「うおっ、なんじゃこりゃ・・・って、うわっ鳥になってる」
次に体の異変に気が付いた。
鳥になっているのである、体の動かし方はなんとなく分かる。
本能的な感じで、覚えているんだろうな。
あと視界にさっきから、映り込んでくる景色と同様に赤い。
「なんでなん」
翼で器用に頭を抱えて、うずくまった。
傍から見れば、毛づくろいしている美しい鳥である。
その状態で、最後の記憶を引っ張り出す。

休日で給料日だったので銀行に行きます。
←
銀行強盗が登場しました。
←
大変危険ですので言いなりなりました。
←
数時間くらい後に警察到着
←
後ろの子どもが泣き出して・・・パァン
←
銃声が聞こえた。
←
ゆっくりこちらに上から飛んでくる弾丸
←
意識のブラックアウト

「あっ、死んだ・・・じゃない、マジかよ」
どうやら最後の記憶では、強盗が拳銃を撃って、その弾丸が跳躍して俺に当たったようだ。
運がない、最悪だ。
「あ゛ぁ゛、これからどうしよっか・・・」
思考が冷静になってきた、というよりは無理やり切り替えた。
こうなったら仕方がないので、考えない事にする。
考え込んでも埒があかないし、昔からこういう人間性なので無問題だな。
「・・・飛んでみるか」
俺は鳥なので空を飛んでみた。
飛び方は、体が覚えているようなので問題はない。
しかしどこまで行っても、真っ赤だな・・・うーん、なんだっけ？
「あー、アレだ。緋色の鳥だっけ？」
数時間くらい飛び続けて、ふとそう考えが過ぎって着陸した。
「えっと、そう、ＳＣＰ財団って架空サイトの奴」
俺はＳＣＰ―９１０―ＪＰやＳＣＰ―２０００―ＪＰは記憶に残っている。
他にも原典の『彫刻』とか、『クソトカゲ』『アベル』『キチクマ』などの有名所は知っている。
「緋色の鳥ってどんなＳＣＰだっけ？」
そこまで考えようとすると、見知らぬ記憶が浮かび上がった。
その記憶は体の元の持ち主、つまり緋色の鳥の記憶なのだろう。
星の生命を喰らって成長し続けたが、ある日に新しく誕生した生命に封印された。
鳥という姿を付与されて弱体化したが、それまでに無かった知恵を考える力を持った。
今は休眠して、新たに生命を喰らえるようになるのを待っている。
そうして休眠中に落ちてきたものを喰らったら・・・そこで記憶は途切れている。
要約をすればそんな感じの記憶だった。

「・・・もしかして俺なにかやっちゃてる?」
また、翼で器用に頭を抱えるはめになった。

第1話

「はぁ、どうしよう・・・」

推定、緋色の鳥となって、体感的に数日が過ぎた。

今は気分を上げるために空を飛び続けている。

正直この世界は目に毒だ。

全部が赤いし・・・しかも全然、景色が変わる気配がない。

どこまで飛び続けても、赤い原野に赤い空だ。

「うぅ、休憩するか。精神的に辛い」

そう言って、俺は地面に降り立った。

記憶から色々と現状に対して推測している。

例えば、俺が緋色の鳥と言う存在に吸収されたが、逆に吸収して成り代わってしまったのでは?という事だ。まぁ情報が少なくて、そこまで分らんのだが・・・

多分そうなんだろうと考えている。

緋色の鳥側の記憶の大半が、眠り続けていた弊害か、半分以上が抜け落ちている。

そんな状況で、深く考えることができないのだ。

正直、俺が緋色の鳥を逆に吸収できた事に対して、大きな疑問を抱いているが、分かる日は来るのだろうか?

それにしてもアレだな、腹が減ってきた。

これ以上動くのはやめておこう。

緋色の鳥が永い休眠を行っていて、俺の魂的な何かが、目の前に落ちてきたときにバクンッ、と速攻で喰らった理由が分かった気がするわ。飢餓状態で寝ぼけていて、目の前に久しぶりのご飯があれば、誰だって食らいつくだろう。例えそれには、毒が混入されていたとしてもだ。

「とりあえず、寝る・・・」

俺は飢えを誤魔化すために眠ることにした。

そして意識が完全にシャットダウンした時に、獲物の匂いを感知した。

「ギャアアア」
雄叫びを上げる。歓喜を上げる。口から涎は出ないが、喉が鳴る。
そこに俺という理性はなく、体は緋色の鳥としての本能で動き始めた。
跳んで、飛ぶ。
速く、速く、速く、速く、もっと速く飛べ。
「ハハハ、成功だ。新たな発ｋ・・・」
ブチッ
喰らったぞ、美味い・・・
腹が満たせる、もっと食べたいなぁ。
戻れ、戻れ、戻れ、戻れ、戻った。
緋色の世界の時が戻った。
もう一度、もう一度、もう一度、もう一度、もう一度。
繰り返せ、繰り返せ、繰り返せ、繰り返せ、繰り返せ。
「ハハハ、成功だ。新たな発ｋ・・・」
「ハハハ、成功だ。新たな発ｋ・・・」
「ハハハ、成功だ。新たな発ｋ・・・」
「ハハハ、成功だ。新たな発ｋ・・・」
「ハハ・・・ハ？、なんだ何かがおかしい」
「なんだ、なんだ、なんだ、なんだ、なんだ」
「なにが、なんだ。逃げないと、なぜ？なぜ？」
「やめろ、やめてくれ、嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ」
「死んだ？生きてる？どうして？」
「くそがぁ、化け物め。やめろ、やめてくれ」
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ・・・あっ、そうか」
また、巻き戻った。しかしそこに獲物はいなかった。
しかし鳥は歓喜していた。獲物が自らやってきてくれていると、本能は理解しているから・・・
俺（理性）は起きない、本能が抑えているから・・・
近い未来のＳＣＰ―４４４―ＪＰは、俺（理性）を起こさず動き出した。

第2話

めざめ　とびたて　緋色の鳥よ　すべてをくわらぬ　うえのみたまよ

どこからともなく、そんな祝詞が部屋中に響いた。

緋色の鳥、かの化け物は動きを停止した。

「やった・・・ぞ、後は・・頼みます。■■主任・・・」

祝詞を紡いだ男は、血だまりの中に倒れ伏せる。

その意識を消失させながら・・・

「ふぁ、んっ?えっ?はっ?」

俺は目覚めて、困惑を隠せなかった。

辺り一面が赤黒い、鉄錆の香りが漂い、地に大量の肉塊と肉片が不規則に落ちている。

いや、よく見ればまだ完全に形を残している肉塊もあるが・・・

まて、人の死体の事を肉塊と考えたのか?

なんだろうか、鳥と融合したからだろうか?

・・・うん、どうでもいいな。俺は俺だからな!

「さて、どうするか」

今この場から分かることは、この場所がおそらくＳＣＰ財団の施設だと言う事だ。

目の前にＳＣＰと、プリントされている白衣を着た肉塊が、倒れ伏しているからね。

後は、ここから離れた場所に生存者が1人いるくらいだろう。

「一先ず、様子を見に行くか」

ふわっ、と飛び立ち、壁をすり抜けて生存者の所まで一直線に飛ぶ。

感覚的に実体が無いと思ったから、できると考えたので実行してみたらいけたわ。

数分もすれば、目的地の天井裏に辿り着いた。

大量の配線があるだけで、なんの面白みも無いけどな。

さて、頭だけこっそりと覗かせて、覗き見てみるか。

「奴の事を知っているのも、残りは私だけか・・・■■君、時間稼ぎありがとう。どうにか間にあったよ・・・後はこの場所を封鎖するだけだ」
白衣の男が、必死でパソコンに入力している。
遠目から見る限り、報告書の類いだと思われる。
「ふぅ、本当は残すべきではないんだろうが、もう遅いか・・・」
白衣の男は、ふぅっと椅子に深く座った。
体の伸ばす、パキパキと音が聞こえた音から、長時間座り続けて作業していたのだろう。
「っ！」
ドンドンドン、ドン
白衣の男は白衣の内に手を突っ込み、拳銃を取り出して俺の居る天井に撃ちこんだ。
突然の事で俺は驚いたが、拳銃の弾丸は身体をすり抜けていった。
そして俺は、天井からすり抜け現れる。
「くっ、ここまでか・・・」
拳銃を構えたまま、俺から離れるようにして扉へとジリジリゆっくり動いていった。
「・・・そいつはどうかな」
白衣の男の言葉に、俺はそう言った。
「なっ！・・・なんだと？」
白衣の男は驚いている。
驚愕の表情を浮かべて、しかし拳銃の銃口はこちらに向けたままだ。
「「・・・」」
静寂がこの空間を支配する。
さてノリで言った言葉が、こんな空気になって、どうきりだしたものか・・・
俺は決め顔(できているのか分からない)みたいな事をしながら、心の中で頭を抱えていた。

第３話

静寂が空間を支配して数時間
白衣の男は俺を睨み続けて、俺はのんきにこの空気をどうしようと考えていた。
そしてそんな状況の終わりは、白衣の男の言葉から始まった。
「話せたのか、ＳＣＰ―４４４―ＪＰ」
やはり俺はＳＣＰ―４４４―ＪＰなのか、知りたくもあったけど、知りたくなかったな。
「さぁ、どうだろう」
ちょっとはぐらかしてみる。
ちなみに俺は日本語で話している。
「・・・なぜ、あんな事をする」
「あの惨状か？なら知らんな」
うん、知らない。おそらく、寝ぼけと空腹が引き起こした只の事故です。多分
こういうのって確か、夢遊病って言うんだったか？
「何故だ」
「寝てたもんで、今さっき起きた」
「・・・そうか」
「そうだ。こういうのを夢遊病とか、言うのでは？」
俺がそこまで言うと、白衣の男はパソコンの前へ移動し、椅子に座った。
カタカタカタカタ
そしてパソコンに、今の会話内容を入力している。
なお、この間の寸分違わず、俺の眉間ど真ん中に向けて銃口を向けているのだが、財団の博士は皆、狂ってるとか言われているが、こいつもかよ。
「続き行くぞ」
「いつでもどうぞ」
俺は肩羽を上に持ち上げ、肩羽を胸の前へ、お辞儀をした。

「なぜ寝ていたんだ」
「空腹が凄くてな、寝てないとしんどかったもんで、まぁ、熊の冬眠みたいなものさ。あぁそれと今、腹は膨れているから、当分は寝るつもりはない」
　嘘は言っていない。間違ってもいないだろう、今は満腹なので当分は、眠らなくても大丈夫な筈だろう、寝ればまた夢遊病状態（仮定）になるだろうからね。
「そうか、それは一先ずの安心か？」
「さて、それはあんたらが決める事だ」
　白衣の男は少し考えるようにして、パソコンへ入力をした。
「・・・ふぅ、さてこれからどうするか」
　白衣の男は、頭が痛そうに眉間をおさている。
　そんなこと呟かれても、何とも言えないのですがそれは・・・
「んん？ソレはなんだ」
　白衣の男を観察していたら、その後ろに突然虚空から、出現してきたものが見えた。
「・・・何故、これがここに」
　それはコーヒーの入ったカップだった。
　しかも湯気が発生しているので、おそらく出来たてのホカホカコーヒーだ。
　コーヒーはあまり飲んでいなかったので、詳しくは分からないが、出現したコーヒーは、高級な代物だと直感できる。
「良い匂いだな」
　白衣の男は、出現したカップを持ちあげて匂いを嗅いでいた。
　そして一口飲んだ。
「美味い、しかしなんだ？何かがおかしいな」
　俺は理解した。あのコーヒーとカップは俺と同じで違うものなんだと言う事に・・・。

第４話

「そのコーヒー・・・俺の能力だ」
俺と同一の代物だと分かって、ついそう口に出してしまった。
「なに？」
白衣の男は怪訝な顔をする。
こうなっては仕方が無いので、思い出した事を説明する事にする。
「俺の能力で出現したフィクションだ」
「なんだと、コレがか？」
白衣の男はコーヒーの無くなったコップを持ちあげて見せた。
「そうだ、そして同時にそいつはあんたが望んだものだ」
きっと白衣の男の脳内で、コーヒーを飲む自分をイメージしたに違いない。
だからコーヒーが、あの机の上に突然出現した。
まさか能力影響下の人間も、俺と同じ事が出来るようになっているとは思わなかった。
いや、そもそも忘れていたんだから、そんなこと思う事も出来ていなかったか・・・
「あぁ、確かにコーヒーがあればなと思ったが」
「そいつが原因さ、ただし現実に起きている事じゃない」
そう現実に起きている事では無い。
能力影響下にいない第三者が、さっきの状況を見れば、パントマイムをやっているようにしか、見えていないだろう。
しかし逆に言えば、それだけ本物に近い幻想を、認識していると言う事だ。
「あんたの飲んだコーヒーは幻想、俺の能力影響下から離れればコップは消えるし、飲んだ感触も無くなるだろうな」
「・・・・・・規格外だな」
「おいおい、そんな事を言うな。まだ良心的だろ」
他の奴らと比べれば、まだまだ良心的だと思うね。ほんとに
例えば、トカゲとか、シャイで（ナイス）ガイな奴とか・・・うん、

この話題は止めておこう。
「そういや自己紹介していないな、あんた名前は何て言うんだ？おっと俺に名は無いぞ、もう既に捨てたからな。いや、意味が無くなったが正しいのか？」
「最後の言葉が気になるが、まぁそうだな。俺は［削除済］だ。この場所で、主任をやっていた。今ではお前のせいで、この有様だがな。ぜひ■■とでも呼んでくれ」
　露骨に強調したな、こいつ・・・
「へぇへぇ、わるぅございました。んで■■、これからどうするんだ」
「こいつ・・・はぁ、まぁいい。そうだな、外に出て他の支部との連絡手段を探さす事だな。ここは、辺境中の辺境、［削除済］に存在しているからな」
　俺の情報が出ていかない様に施設は完全停止、機動の為の発電施設は崩壊し、生き残って使える予備バッテリーはもう僅か。精々記録しかできないパソコンで、記録を残すだけらしい。
　今いるのは、地下１３０ｍ地点の部屋だとのこと。
「・・・ちょっと失礼」
「おい、どこに行くんだ」
「能力影響下入った人間？が、今しがたこの上に」
　俺はこれ以上の返答は聞かずに、飛び上がった。

第５話

大体６０ｍ程だろうか？
地面の中を飛ぶと、そこには人間が居た。
地面の中にだ。
「・・・暗いよぉ、怖いよぉ、皆さんどこに行ったんですかぁ」
どうしよ、多分目の前のコイツＳＣＰだよなぁ。
「あぁ・・・」
えーっと、肉体の方は無理だな。
そもそも俺に実体ないし・・・よし、精神を肉体から切り離して連れていくか！
そうと決まれば、早速・・・
「えっ？・・・誰、何、なｎ、くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」
よぉし、切り離し成功っと、後は掴んで急降下！
「みぎゃぁあああ」
ドサッ
「うぉっ、びっくりした」
ＳＣＰと思われる男を連れて戻ると、■■は追加でコーヒーを嗜んでいた。
部屋中に良い香りが漂っている。
「なんだ、こいつは」
「しらね、地中で１人寂しそうに蹲っていたから連れて来ただけだ。肉体の方は無理だから、精神だけを分離させてな。今からこいつは俺の世界の住民って訳だ」
ケタケタと俺は笑いながら、■■にそう言った。
「そうか、地中にいたか・・・なんだったか、聞いたＳＣＩＰにあったな」
ＳＣＩＰ？なんじゃそら、ＳＣＰオブジェクトの別称か何かかな？
そんなのあったのか、知らんかったわ。
「・・・多分、コレだなＳＣＰ―０９７―ＪＰ。ワンダーテインメント博士シリーズだな」

あっ本当だ。右腕にそう刺青が、彫られてる。
「あなたが神ですか」
うわっ、なんだこいつ、助けなきゃ良かった。
「とりあえず、消えとけ」
ＳＣＰ―０９７―ＪＰ、ボッシュートです。
ガコン
そんな音と共に地面が、パカッと開いた。
「へっ？・・・うぉぁあああああああぁ・・・」
そしてそのままＳＣＰ―０９７―ＪＰは、穴の底へと落っこちていった。
あの先には緋色の原野が広がっている。
「あっ、・・・大丈夫なのか、今のは・・」
「大丈夫なんじゃない？」
■■が目の前のコントを見て頭痛そうに眉間を指で押さえている。
俺はそんな博士の言葉に、適当に返答しておいた。
「あんな事より、これからの事を考えろよ」
「そうは言われてもだな・・・はぁ、頭痛い。戻った時、なんて言えばいいんだ」
■■は頭に加えて、胃が痛くなったのか、胸を抑え始めた。
そういや■■、いつのまにか拳銃手放しているな。良いのだろうか？
「とりあえず、脱出だな。お前は大丈夫だろうが、予備電源が切れると酸素が薄くなる」
机の上に手放し置いていた拳銃を手に取り、白衣の内側に装備した。
どうやらもう出発するようだ。
「何で上がっていくんだ？」
「階段だ、エレベーターは使えないからな」

第６話

「はぁはぁ、ここまで上がれば、予備電源切れても大丈夫だろ」
■■は長い階段を上がってお疲れの様だ。
ちなみに俺がついていけるように、白衣に少量の血を付着させて貰っている。
ここまでの間、どれだけのＳＣＰじゃなくて、ＳＣＩＰが確保、収容、保護されたのかを聞いた。
海外の方は詳しく知らないそうだが、日本では憶えているだけで、約１６００件程のＳＣＩＰが、確認されているらしい。
どういう事かと言えば、最低でもＳＣＰ―１６００―ＪＰまでのＳＣＩＰ―ＪＰシリーズは、発見されている状況なのだろうと推測できる。
おん、■■が少し休むみたいだな。
「おう、そうみたいだな。ホレ、スポーツドリンクだ。飲め」
「は？」
ゴトッと１５００ｍｌサイズのスポーツドリンクを目の前に置いた。もちろんこいつは、俺の能力製なので、飲んでも美味しくてサッパリするだけで、なんの意味なんて無いんだがな。
ボフンとスポーツドリンクが消えた。
■■が消えろとでも考えたんだろう。
「遊ぶのは後にしてくれ、ふぅ行くぞ」
「へぇーへぇー、面白くないの」
「それで結構だ」
数分ほど階段を上り続けて、出口の扉が見える。出口前には死体があり、頭を拳銃で撃って自殺したんだろうと考えられる。電子ロック扉の危機を念入りに破壊してな。
「おぅおぅ、外に行く為の扉が壊れてるぜ」
「問題無い、これ位ならなんとかなる」
そう言うと、白衣の内からどこに入っていたんだよ、と思わず突っ込まずにはいられない工具箱が取りだされた。

「おい待て、どっから取りだしたソレ」
「フッ、私の白衣は特別製でな。ぜんまい仕掛け製なんだ、ちゃんと許可貰って使用したさ」
「おっおう・・・その工具もか？」
「あぁそうだ。持ちだすのに苦労したんだぜ」
カチャカチャっと音を鳴らしながら、パパパッと電子機器を修理している。
待って、その工具箱、材料も出てくんの？
それなんて言うチート？ドラえもんにそんな秘密道具あったなぁ・・・
「よし」
カシューァ
そんな感じの音を立てながら、扉が開いた。
扉の先には、人一人として居なかった。
「誰も居ないねぇ」
「今この場所は放棄されている状況だからな・・・この場所に収容されているＳＣＩＰの確認をしとかないとな」
「Ｄクラス職員の方は、いいのか？」
「どこに住居地があるのか、俺は知らん」
えぇ地図くらいあるんじゃねぇのか・・・
「まぁ見つかった時にどうにかすれば良いだろう、最優先はＳＣＩＰの方だ」
■■はそのまま、ズンズンと先へ進んでいった。
何かあっても俺はすぐに駆けつける事が出来るし、一旦緋色の原野の様子を見に行ってくるか。

第７話

「・・・コレは酷い」

■■と別れて、一旦住処とも言える緋色の原野に戻ってきたが、そこでは死屍累々の有様が、広がっていた。

右見て、左見て、人の屍。

よくよく観察して見れば、その全ては皆一様に喰い荒らされている。

頭に始まり、胴体、右腕、左腕、下半身、上半身ｅｔｃ.

どの死体も、何かしらの部分が、喰い荒らされているのだ。

見える辺り一面のアレらは、俺がやった事なんだ、と言う事を見れば、否が応でも理解できる。いや、理解する。・・・が、こんなどうでも良い事は、そこらの隅にでも捨て置いて、この世界に落っことした「ＳＣＰ（ミスターずぶずぶ）―０９７―ＪＰ」を見つけ出さないとな。

しかしこんな状況を見て、俺がやった事なんだと分かっても、どうでもいいと思えてしまうのは、俺はすでに人では無いのだろう、もしくはサイコパスな一面があった。・・・って何を考えているんだろう、今の優先順位はＳＣＰ―０９７―ＪＰだ。

「・・・うーん、感知できる範囲内には、動いている者は誰一人としていないな」

ここいら近辺に、落っことした筈なんだが、他者をこの世界に自力で入れたのは、ＳＣＰ―０９７―ＪＰが初だったから、落ちる地点がズレてしまったか？

「仕方が無い、飛ぶか」

俺は羽を広げて、身体全身を使うように、振り下ろす。

すると身体がフワッと浮かび、緋色の大空へと飛翔した。

考えうる限りでは、ＳＣＰ―０９７―ＪＰは気絶か、発狂をしていると思っている。

後は走って、死体の無い遠くまで行っている最中か・・・

そう言えば、この世界なら人は空を飛べた筈だ。とんで離れていっているのかもしれないな。

まぁ、どうにせよ。探し出すだけだ。
数時間程、円を描くように飛び、その範囲を少しずつ広げていくと、動く者の気配を感じ取った。
たぶんＳＣＰ―０９７―ＪＰだろう。
ついでにＳＣＰ―０９７―ＪＰ以外に、小さな小動物の様な気配が２つする。
気配の元へと一直線に飛んでいくと、ありえないものを見た。
青い海だ。この景色を見た俺は、世界が浸食されていると感じとった。
そして同時に莫大な不快感を感じたが、その感情を一先ず抑える。
「何が起きているんだ」
海と原野の境目が見えた。
そこは言うなれば、緋色の砂浜や緋色の海岸だろうか？
そんな光景が横に広がっている。
そしてＳＣＰ―０９７―ＪＰも見つけることが出来た。
誰かと何かを話している様子だ。
空から見える範囲では、ＳＣＰ―０９７―ＪＰの話し相手は・・・
黒色の猫のようだ。
あの黒猫が、あの海の原因だろうか？
一先ずは話しを聞くとしよう、その為に俺は１人と１匹の近くへと舞い降りたのだった。

第８話

「よっと」
「君が、この地の主人かな」
バサァ、と1人と1匹ではなく2匹の近くに降り立った。
すると、黒い猫に話しかけられた。
「そうだな、おそらく」
俺は曖昧に猫の問いに答える。
実際に俺は、今の俺がこの緋色の原野の主人かどうか、分かっていないからな。
「うむ、警戒するのは分かる。君のテリトリーにこうして侵入しているのだからな」
「警戒はしてないさ、好きに居れば良い」
目の前に居る猫と、海に浮かぶオウムガイ。２つで１つのＳＣＰなんだろう。
それもおそらくは、俺と同じ精神世界に存在するタイプだ。
「・・・・」
「・・・・」
微妙な空気が流れる。
その間、『ＳＣＰ―０９７―ＪＰ（ミスターずぶずぶ）』は、コーヒーを取りだして飲んでいる。
ＳＣＰ―０９７―ＪＰは、何が何だか状況がイマイチできていないが、一先ず落ち着く為に飲んでいる。
オウムガイは、海の上を相変わらずプカプカと浮かんでいるようだ。
「・・自己紹介がまだだったな、私の名は『猫』だ。それ以上でも、それ以下でも無い」
「・・ご紹介感謝しよう。俺は、そうだな・・・『緋色』とでも呼ぶといい」
「我が名　呼び名は　ノーチラス
彼を救えた　オウムガイ」

「えっ？えっと、俺を作りやがったクソ親父には『ミスターずぶずぶ』って呼ばれてました。
猫さんには言いましたけど、こちらの緋色さまに助けてもらった？と思っています」
「「「・・・・・」」」
猫から始まった自己紹介は、無事に終わったが、話しが続く事は無かった。
気まずい空気が、また流れ始めた。
この場に居る生きる？者は、皆が心の中で（こっからどうしよ）と完全一致していた。
そして、この微妙な合間を撃ち破ったのは俺だ。
「まぁ一先ずアレだ。仲良くしようぜ？」
「なぜ疑問形なのかな？」
俺の言葉に猫は反応する。
「海に浮かぶは　ノーチラス　先に見えるは　赤き砂浜」
ノーチラスは相変わらずのようだ。
「えっとあのー・・・緋色さま文句を一言だけ言っていいですかね」
「なんだ」
そしてＳＣＰ―０９７―ＪＰ、いやミスターずぶずぶが、文句を言いたいと居てくる。
「確かに思い返せば、俺のあの行動はどうかと思いましたがね。その結果が落とし穴で、その先が死体の山って言うのは、えっとですね・・・その・・・」
「あぁ、うん。悪かったな、言いたい事はよく分かった」
ミスターずぶずぶの言葉に俺は全力で目を逸らして、脱兎の如く逃げる構えを取って・・・
「それでは失礼する」
全力で大空に向かって飛び去った。
目指すは、あの■■の所である。
「逃げたあああっ！」
そしてミスターずぶずぶの渾身の叫びが、聞こえたような気がする

が気のせいである。

第９話

「はっはっはっ」
「ふっふっふっ」
・・・何コレ？
いや、マジでなんだ。この状況は・・・
緋色の原野から、戻ってきたら、■■とオランウータン（首飾り着用）が酒を飲んでは、笑いあい語りあっていた。
うん、オランウータンは悪名高き『ブライト博士』に違いない（確定＆決定）
異論は認めない。
さて、どうするべきか。
あの１人と１匹？は、まだこちらに気がついていない様子だ。ってそれは、まだ姿を見えるようにしていないので、それは当り前か・・・。
「それで、ＳＣＰ―４４４―ＪＰはどうだったんだい？」
姿オランウータンの癖に、流暢に日本語しゃべっていて笑えるんですけど。
「Ｅｕｃｌｉｄ認定でもよさげですね。ＳＣＰ―４４４―ＪＰ―０２の方が、表に出ていた場合に限りって、話になりますがね」
どうやら俺の事を話しあっているらしい。
まぁ原作と言ってもいいのか分からないが、原作？的には、クラスなんて存在しないＳＣＩＰだった訳ですが・・・
「ふむ・・・本部への報告はどうするかね」
ブライト博士、その考える人のポーズするの辞めてもらえません。なんか面白いんで
「むっ、誰かに馬鹿にされた気がするぞ」
「・・・あ～、多分気のせいでしょう」目を逸らす
うわっ、ブライト博士鋭くない？
んでもって、これは俺が、戻ってきている事に■■は、気がついているな。
「はぁ、この地に居るＳＣＩＰの保護が面倒だな。まぁお陰で、好き放

題できる訳なんだが」
「・・・はぁ、玄関を開くんじゃなかった」ボソッ
■■は頭が痛そうに眉間を抑えた。
どうやら■■が、ブライト博士を招き入れてしまったらしい。
ここがこれから、どれだけ悲惨な事になるのか・・・全くもって想像できないな。
いやだって、ブライトの記事ってそんなに読んでないからさ。それに実物に出会うのは、これが初めてな訳だしさ。あの短い会話だけでも、すでに何個かのＳＣＩＰが、ぶっ壊れていそうだな・・・
まぁまだ顔を見せていないので、そろそろブライトと対面するとしよう。
あー、なんかやだなぁ。したくないなぁー。はぁ
「よっと、戻ったぜ」
■■は俺が実体化すると、超人的な反応速度で、拳銃を引き抜き銃口を向けてくる。
そしてブライト博士は、何かの拳法の構えを取った・・・その瞬間、俺の生存本能とも言うべきモノが、俺に殺気を出して、構えろと警告を出した。
■■の方は見ても何の感情も湧く事は無かったが、ブライト博士の方はヤバイと感じている。
これは一体、何なんだ・・・？

第１０話

一言で言おう、地獄絵図である。
どうにか財団サイトへのダメージを最小限に抑えて、ブライト博士を緋色の原野に引き込んだが、地獄であった。
ヤバイ、マジでヤバイ（語彙力の消滅）
今、何回目の時間逆行だ？
強すぎるんですけど、何なんだ？まじで何なんだあの拳法は・・・。
っ！
あぶねぇ。避けるのでも精一杯だ。
特に『正拳突き』がヤバイ、宇宙が創造されてるってどんな威力だよ。
（Ｆａｔｅ／の『ギルガメッシュ』の宝具の１つ『天地乖離す開闢の星』並み）
「どうだね財団神拳の威力は！」
「素晴らしく、クソだよ。こっちくんな」
あっ、しまった。
俺以外にもＳＣＩＰが、この緋色の原野に居る事を忘れてた。
・・・スマン、強く生きてくれ。
俺は能力をフルで発揮する。
それは幻覚を感じさせる能力、幻視・幻聴・幻触・幻臭・体感幻覚・幻肢などのありとあらゆる幻覚を感じさせる事により、あたかも現実であると錯覚させることが可能だ。
例えば、トラックに轢かれる。なんて幻覚を見せるとすれば、主に扱う幻覚は『幻視』『幻聴』『幻触』『幻肢』の４種だろう。『幻視』でトラックを見せ、『幻聴』でクラクションなどの環境音を再現、『幻触』で周囲の空気やトラックにぶつかった際の触感、そして『幻肢』にて轢かれた際の痛みを感じさせる。この時点で死ぬ人は死ぬ。俺の能力影響下に存在していない人間にとっては、心臓麻痺で死亡とかそんな感じに思われるだろうな。『幻肢』で死ななかったら、『幻触』で血が流れ出る感覚を感じさせれば、嫌でも脳が勘違いを引き起こして死

ぬ。
それだけの事を、今の俺は世界規模でやることが可能だ。
やるつもりは一切にないけどな。
さて、そんな危険な力をブライト博士相手に使用する訳だが・・・
問題は無いな（無慈悲）
さぁ、パーティータイムだ（深夜テンション）

以下パーティータイム中
『流星群』…大量の隕石が降ってくる幻覚
ブライト対処法…連続チョップで粉々に切断する
『火災』…大地が真っ青に燃え盛る幻覚
ブライト対処法…『朝孔雀』に似た技で消し飛ばす
『竜巻』…文字通り竜巻の幻覚だが、時間が経つごとに風速が増加していく
ブライト対処法…自身を逆回転させて相殺させる
『落雷の雨』…大量の落雷が空から落ちてくる幻覚
ブライト対処法…どこからともなく棒を手に取り、雷を棒で防いでこっちに投げ飛ばしてきた（隻狼）
『恒星の衝突』…恒星同士を衝突させる幻覚、イメージがつかないので再現が辛い
ブライト対処法…息を吸い、思いっきり吐く（ふざけんな）
『世界（ザ・ワールド）』…四方八方から無数の刃が飛んでくる幻覚（単純なのが良いのかな？と思って選択）
ブライト対処法…ゲッダンダンスで全回避（うっわｗ）
『ビックバン』…ソレっぽい爆発を感じさせる幻覚（イメージが辛い）
ブライト対処法…正拳突きで相殺
『質量攻撃』…とにかく重く硬くデカイ何かが突撃してくる幻覚
ブライト対処法…地面を掬い取って投擲で相殺
など

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ」

「けほっ、げほっ、こほっ、ごほっ」
一体どれほどの時間が経っただろうか？
現実時間では、おそらく1週間も経ってはいないだろう。しかし精神の世界では、既に数百年は経ったような気がする。それだけ長い年月を戦った気がする。
ガシッ
気がつけば俺とブライト博士との間に友情が芽生えていた。
「ひゃひゃひゃ、ヤバイ奴らが手を組んだぞ」
「海に潜るわ　ノーチラス」
「・・・キャラ変わってないか？」
その様子を見ていたＳＣＩＰが１人と２匹居たとか、居ないとか・・・

第11話

はい、ブライト博士との友情を深めた所で、現実へと戻ってきました。

いやぁ～、強敵でしたね。ははっ（ドン引き）

「・・・終わったみたいだな」

現実世界に戻ると、そこには■■がコーヒーを哀愁を漂わせながら、華麗に飲んでいました。

・・・ごめん、存在すっかり忘れてた。

お詫びに腹の足しにならない、豪華な料理を奢ってやろう。

味は楽しめる筈だ。味はな・・・

「いらん」

あぁ！まだ何も言っていないのに・・・

うわっ、幻覚のガンナーが、弾丸を撃ち込んできやがった。

・・・あっぶねぇ、消すの遅れていたら、蜂の巣になってた。

「ちっ」

あっ、おい、今舌打ちしたな■■。

って言うか、俺より幻覚、使いこなしてないか？

「■■君、■■君何日くらい、行ってた？」

「ん？あぁ、だいたい1日だ」

「ほうほう」

「それでd・・・」

あ～ぁ、ブライト博士が、■■と情報交換を始めた。

こうなると、話しに入っていけなくなるんだよなぁ・・・

ちなみにブライト博士が、財団神拳？とやらが使える理由を、あの戦いの終わった後に、聞いてみたんだが、

『絶対にブライトには知られるなリスト』

（ありとあらゆるＳＣＩＰを利用した対ブライト博士閲覧防止＆進入禁止＆発見防止セキリュティ付き）

をどうにか突破した先で、偶然見つけたので、習得したらしい。

馬鹿じゃねぇの？

もう一度、言わせて貰うが、馬鹿じゃねぇの？
これ、本人の前で言ったら、またあの戦いを繰り返す事になるんだろうなぁ（白目）
と言うか何なんだよ。
ありとあらゆるＳＣＩＰを利用した対ブライト博士閲覧防止＆進入禁止＆発見防止セキリュティ
って、ありえないだろ。
なんでそんなセキリュティ作っちゃうのかな？馬鹿なの？死ぬの？
そして、発見防止のセキリュティが、付いてるのに、偶然で見つけて、進入禁止を突破し、閲覧防止を解除して、中身を見たブライト博士も大概だけどさぁ。
いや、普通にありえないよなぁ。だってＳＣＩＰをフルに使っていた、って話しだし・・・
う～ん、やっぱ財団に所属する博士って、頭がおかしい奴らばっかりだな（白目）
「それじゃ、行きましょうか。こいつ居ますし、Ｄクラス職員は残ってるんでしょ？」
「えぇ、そうですね。いざとなったら、無力化すれば良い。本部に連絡がついた時には、財団神拳を自己防衛の為に使ってしまった、とでも言い訳すれば良いですからね」
考え事をしていたら、話しが進んでどこかに行く事になってる。
まずはＤクラス収納室に行くらしい。
まぁ、このメンツ（緋色の鳥、実質的に無限バンダナ装備している次元大介な■■、財団神拳の継承者ブライト博士）が居るから、犯罪者なんておそるるに足らず、な感じがめっちゃ漂っているんだよなぁ。
・・・そういや、このサイトに居るＳＣＩＰって、どれくらい収容されていて、どんなＳＣＩＰが居るのだろうか？
なんか、楽しみになってきな。

番外1話「とあるＳＣＰ」

突然だが、自己紹介をしよう。
俺は『山田（やまだ）　徳井（とくい）』、転生者だ。
何を言っているのか、理解できない？
知らん、理解しろ（命令）
んでまぁ、俺は転生した。
この『財団世界』にな。
財団世界って言うのは、俺がそう呼んでいるだけだ。
この世界は『ＳＣＰ』と言う、化け物や現象があり、ソレらを『確保』『収容』『保護』を主目的とする団体がいる。
この事実に気がついたのは、５歳の前世の記憶が戻ってきた時だ。
まさか、くじ引きで転生先を決められるとは思わなかった。
んでもって、俺には『転生特典』と言う、神々の遊び心を貰っている。
その名も、『四次元マンション（俺の命名）』だ。
名前からピンときた奴が、居たと思うが名前の元ネタは『ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲ』の奴だ。
まぁ、似ているだけで、念による能力じゃないんだけどな。
床や壁に手をかざしたら、出入り口『穴』を創れて、そこからマンション内へと、物資の搬入や生物の出入りが、できるわけだ。
穴が閉じていなければ、誰でも出入りできて、複数設置もできて、部屋ごとに上限が異なる。
穴に入ると、行き先の部屋の天井に穴の出口が開き、そこからマンションに入り、天井の入口は人や物が入ってきたと同時に閉じる。
部屋には扉があり、そこが出口でマンション内に入った時の場所に出る。
扉には鍵穴があって、マスターキーを使用すれば、その扉から好きな部屋に移動できるのだが、マスターキーを使用できるのは俺のみだ。
んで、１部屋につき、１つの出口を創れてる。

出口は魔法陣のようなデザインであるが、見えるのは俺のみで、出口を設定した部屋から、退室した場合は、入ってきた穴の場所に関係なく、必ず出口の場所に転送されることになるようだ。
マスターキーの使用は除いた者とするけどな。
後はまぁ、マンションの階層は５階建てで３５部屋あり、穴を通過中に消せば切断にも使える。
そんで今は、この能力が財団に認識されてしまい、確保され収容され保護されている状態だ。
調べられるにあたって、部屋は一つだけと嘘をついた。
快適な場所だが、軟禁状態なもんだから、協力する気はさらさらない。
この世界を守ってるのは分かるけど、やり方が気に喰わないのが多々にある。
まぁ、だからと言って、現状を破壊する気は無い。死にたくは無いからな。
さて、ここまでは別に良いんだ。
最近、財団の奴らが来ない。なんでかは知らないが、来る気配が無い。
とりあえずマンション内に置いておいた、保存食で食いつないでいるんだが・・・
何かあったのか？施設外に出口はあるから、脱出は問題ない。
施設内にも幾つかあるから、問題は無い。
・・・どうするか？一旦、様子を見に行って見るか？だけど、ばれたら面倒なんだよなぁ・・・

第１２話

「・・・ＳＣＰ―■■■―ＪＰだね」
「あぁ、そうだが」
■■＆ブライト博士と共に、サイト内を探索していたが、どうやら収容違反のＳＣＩＰを発見した。
まぁ、現在進行形で、いくつも起きているから、今更感が半端ないが・・・
（収容違反ＳＣＩＰ→【ＳＣＰ―４４４―ＪＰ（主人公と融合している）】【ＳＣＰ―０９７―ＪＰ】【ＳＣＰ―０８３―ＪＰ】【ＳＣＰ―９６３（ブライト博士）】これくらいか？）
しかし目の前のＳＣＩＰは不思議だな、オブジェクト番号を聞きとる事が出来ない。
これは一体、どう言う事なんだろうか？
「このサイトは放棄された、持ち出せる。連れだせるＳＣＩＰは、全て運ばれたと思ったんだが？」
「そういや、収容施設が一回大きく揺れたなぁ。アレだったのか？」
「あぁ、多分それだ。施設の放棄決行時は、収容施設ごと離れるからな」
聞くだけで分かる、財団の無駄な行動力。
その無駄な行動力があるせいで、ヤバイＳＣＩＰが覚醒するんだよなぁ・・・
なんだっけ？この世界にあるのか知らんけど、確か・・・そうっ‼、『塔』って奴だ。
・・・考えて、ＳＣＰ―ノイズ―ＪＰ（オブジェクト番号が聞き取れなかったから）の顔、俺を見たときから明らかに真っ青だよな。
まるで、俺の本来の性質を知っているかのような顔だ。・・・まさかな？
いや、俺と言う事例がある。無いと思うのは、悪手になるだろう・・・
しかし、ド直球に聞くには、■■とブライトが邪魔だな。
隙を見て、あっちに招待して、聞いてみるか？

まぁ、頭の片隅にでも、置いておくか。
「そうだ、■■」
「なんだ、ＳＣＰ―４４４―ＪＰ―２」
長ったるいな・・・
「・・・このサイトのＳＣＩＰはどれくらい残ってると思っているんだ？それとだな、長ったるいから『緋色の鳥』でいい」
「そうだな、確か憶えていただけでも２４あって、内２つが無力化されていたかな？」
「まぁ無力化されたのは、実質的に１つだがね。ははは」
俺は■■に話しを聞いた筈なんだが、ひょっこりとブライト博士が、報告書を持ってきた。
その数、実に３０枚くらいだな。
「このサイトのＳＣＩＰの報告書だ。壊れていないパソコンを見つけて、確認しコピーして来た、現在我々が確認できているのは『ＳＣＰ―４４４―ＪＰ』『ＳＣＰ―０９７―ＪＰ』『ＳＣＰ―■■■―ＪＰ』でよろしいかな」
「そうだな、その位だな」
・・・見る限り『ＳＣＰ―０８３―ＪＰ』も確認済み、と言えんな。
「この中から、コレとコレは確実に居ると思われるよ」
ブライト博士は、楽しそうにそう言った。
「何人かＤクラスが衰弱してたぜ」
その後にＳＣＰ―■■■―ＪＰが、現れてそう言った。

第１３話

・・・一人になったんですけど、どうすればいいと思いますかね。
■■もブライトもＳＣＩＰも皆、俺を置いて先に行ったから、つまり取り残されました。
とりあえずブラブラと、移動してみればいいか？とするなら、どこに行こうかな？
この壁に埋め込まれている地図を見る限り、ここから一番近いＳＣＩＰ収容所は、『ＳＣＰ―０６０―ＪＰ』のようだな。
よし、行くとして、まずは事前情報だな。
ここにまだ存在するだろうという、ＳＣＩＰとしては挙げられていなかったが、このＳＣＩＰは残って居るのだろうか？
この報告書を見る限りは、透明人間ってやつだな。
もしかしたら、俺と同じ精神世界の住民で、俺が他者の感覚を改変するなら、さしずめこのＳＣＩＰは、自身の情報を改変するのだろう。
レベルをつけるなら、低すぎて自力で改変することができない。
だからこそ、報告書のようになっている。いや、もしかしたら、そんな事ができると、知らないだけなのかもしれないな。
んで、到着したわけだが、な～んにもないわ。
扉をすり抜けて見たが、ただ施設の外が、広がってるだけだ。
面白みのない、結果だな。
まぁ、ウダウダ言っても仕方がないので、とっとと次に行くとしよう。
えっと次に近いのが、『ＳＣＰ―１０１―ＪＰ』だな。
このＳＣＰは、ここに残っている確率が高いらしい。
報告書を読む限りは、木だもんな。確かに残っている確率は、高そうだ。
子ども？果実？の方は、移動させられてるんだろうけどな。
おっと、通り過ぎるところだった。
移動速度が速すぎるのは、考えものだな。
んで、さっきみたいにすり抜けると、存在しているな。

元気に収容部屋で、わっさわっさと揺れている。
・・・こいつには興味がないから、博士どもに任せるとしよう。
話し相手にはならないだろうからな、近づいても面白みがないって奴だ。
そんじゃ次だ。
次に近いのは、『ＳＣＰ―５１５―ＪＰ』の収容場所だな。
徒歩でだいたい１０分はかかる距離だが、俺なら1分とかからずに到着した。
到着できるではなく、もうすでに到着している。
さーて、すり抜けまして、おっどうやら移動させれていないみたいだ。
この報告書を読む限りは、こういう奴らこそ簡単に移動させられると思ったんだが、なんで移動させていないんだろうか？
ちなみに今さらになるが、さっきから俺の呼んでいる報告書は、実際には存在しない。
能力を応用して、生み出した俺専用の報告書だ。まぁ能力に暴露させれば、誰でも見て読むことはできるけどな。
んじゃま、さっそく接触するとしようか。
文字や血液といった媒介がなくても、俺の世界へと引き込めるようになった事に気が付くのは、いまから数十分後であり、その数十分間の間にどうやって接触すればいいのかと、考え続けていたのは内緒話だ。

第１４話

さて、『ＳＣＰ―５１５―ＪＰ』と出会った訳なんだが、バリッバリに警戒されました。
いやー怖がらせるつもりは、一切ないんだけども、本能っていうのかな？そういうので、バリッバリに警戒されています。
話し合いになりそうにないなぁ・・・
目の前のグループのリーダーらしき犬獣人は、ゲロ吐き失禁コンボだもんね。
ちっ、面白みのない結果だ。
いや見る分には面白いんだけどな、想像していた結果からして大失敗だな。
はぁ、ここ以外のＳＣＩＰは、面白くなさそうなんだよなぁ。
とりあえず、博士達に合流しに行くとしようかな？
確かこっちに・・・おっ、あった、あった。案内掲示板・・・よし、向こうか。
この距離だと、飛んで３０分だな。
いや、本気を出したら１分で行けるな。
ほい、とうちゃーーー・・・
やっべ、行き過ぎた。
施設の外に出ちゃったよ、やっぱり本気で飛んだらダメだな。コレは・・・
「真っ暗な世界だー」
・・・・・・いやっ、まって!!
宇宙じゃん、ここ宇宙じゃん!!!（大事なことだから２回言った）
ってか、地球どこだよ。帰れないじゃん、このままだと帰れないじゃん。
そしてうるさいんだよ、ピー、ピピー、ピーピー、ってさぁ。こういうのなんだっけ？モールス信号だったかな？とにかくだ、うるさいんだよ。喰らい尽くしてやる。
―緋色の鳥、お食事中―

けふ、ふぅ中々濃厚な味だった。
喰らっている時、めっちゃうるさかったけど、まぁいいか。もう全部食べちゃったからな。
んーで、これからどうすりゃいいんだ？
と言うか、地球どこだよ。
まいったなー、本気を出して飛んだだけで、宇宙まで飛び出すとは思わなかった。
地球のある方向が分かんなくなちまったから、戻ることができないぞ・・・
くそっ、もうちょっと他のＳＣＩＰを見ていたかった。
特に『ＳＣＰ―６８２（クソトカゲ）』とか、『ＳＣＰ―０７６（アベル）』とか・・・あぁ、後は報告書で見たこの『ＳＣＰ―２９４（コーヒー自動販売機）』は使ってみたかった・・・
俺が一体何をしたって言うんだ・・・。うん、色々とやらかしてますわぁ（遠い目）
死んでしまって、緋色の鳥に成り代わって、でも知らん内に大量殺戮をやって・・・
数え始めたらキリはあるな。
これからやらかしていくんだろうと思う事柄を考えたら、なんか頭が痛くなってきた。
あー、真面目にどうすれば・・・あっ、そうだ。一先ず緋色の世界に行くか。
うん、これは良案だな。さて、思い立ったが吉日だ。さっそく行くとしよう・・・